

【研究ノート】

三笠市における葬送習俗の変容

高橋 史 弥

1. はじめに

三笠市は石炭産業で栄えた地域で、他に農業や炭鉱で働く人々を相手にした産業などがあつた地域である。三笠市の人口は 1953 (昭和 28) 年から 1961 (昭和 36) 年にかけては 6 万人程度を有していた。三笠市は 1879 年に幌内炭鉱が開鉱し、石炭採掘のため、本州等の地域から移住してきた人々が主となり形成された町である。主な炭鉱は、1957 年の幾春別炭鉱の閉山をはじめ、1971 年に奔別炭鉱、1989 年に最後まで営業を続けた幌内炭鉱が閉山。その後、人口も急激に減少する時代を迎える。人口は炭鉱関係者だけでなく、それを取り巻いた周辺産業も、炭鉱閉山とともに減少していくことになる。

本論では、炭鉱が閉山した後に人口が急激に減少するといった現象の起こった三笠市の葬送習俗が、市内全域でどのように変化するのかに注目した。本論では、1919 年から 1946 年までに生まれた、三笠市内に在住する 11 人の話者から聞き取りを行なった 30 事例の調査データを使って、三笠市域の葬送習俗がどのように展開されていたのか、そして、葬儀の役割を担う者や方法が、現在までにどのように変化したのかを分析した。

これまで北海道の葬送習俗を研究した主な論考には、高倉 (1974) や矢島 (1979) のものがある。高倉は、北海道の民俗全般にわたって取り上げており、諸事例を収集してまとめている。葬送習俗については、開拓期初期の段階で、いざ死者がでるという死亡寸前の段階には隣近所の知人が見舞いを持ってきて、それほど親しくない者も、危篤患者の元にやってくるのが親切とされていたという事例について紹介している。ただ、そうした習俗の行なわれた地域の背景や、その後の習俗の変化などについては考察するにいたっていない。矢島は、北海道の葬送と、その儀礼が行われている背景を移民政策と結び付けて論考し、習俗の細かい方法にいたるまで解説を加えている。ただ、北海道への移住後、地域の中で習俗が変化していく様子については集中して考察するにはいたっていない。

その後、北海道移住と葬送習俗を結びつけた論考としては、宮良 (1998) らが、北海道の葬儀の諸要素と本州地域からの移住を併せて紹介したものがある。北海道への移住者やアイヌの葬送儀礼の流れを追い、葬儀の諸要素ごとに、地域を明確にしながらの詳細な記述がある。移住者が本州から持ち込んだ文化についての記述もなされているが、地域の中での変化の様子については分析するにはいたっていない。

本論では、炭鉱の閉山によって人口が急激に減少した三笠市において、どのような葬送習俗が展開し、変化していったのかを見るために、以下で述べる葬送習俗の諸要素に注目し、北海道の中では比較的古い時代から移住開拓が始まった地域でもある三笠市域の事例から検討してみる。

2. 葬送習俗における変化 (表-1 葬儀の諸要素の変化 参照)

①死亡場所の変化

死亡場所は自宅から病院へ変化した。1975 年死亡の事例 11 まで自宅で死亡していたの

表一：葬儀の諸要素の変化

事例	逝者と生年	死者の生年と死に年	所在地(三宮市内)	家および主な檀越手の生業	死亡場所	棺作りの担当	位牌作りの担当	四花作りの担当	死装束作りの担当	湯灌の担当	湯灌の方式・略式	液体の用意	洗う範囲	入棺の担当	火葬場・墓地への運び方	遷夜場所	葬儀を行なう場所	土葬・火葬	納骨(埋骨)場所
1	O(1919)(男)	(1881~1928)	岡山	農業	自宅	炭鉱	炭鉱関係	炭鉱関係	炭鉱関係	炭鉱・親戚	アルコールで拭く	炭鉱・親戚	体全体	炭鉱・親戚	馬車	自宅	自宅	土葬	墓地
2	A(1925)(男)	(1864~1936)	堺内	炭鉱	自宅	炭鉱	炭鉱関係	炭鉱関係	炭鉱関係	不明	不明	不明	不明	炭鉱・親戚	徒歩で葬列を組む	自宅	自宅	堺内の釜の火葬場	墓地
3	O(1919)(男)	(1861~1939)	岡山	農業	自宅	炭鉱	炭鉱関係	炭鉱関係	炭鉱関係	炭鉱・親戚	アルコールで拭く	炭鉱・親戚	体全体	炭鉱・親戚	馬車	自宅	自宅	野焼き	墓地
4	K(1934)(男)	(1880頃~1940頃)	堺内	炭鉱	自宅	炭鉱	炭鉱関係	炭鉱関係	炭鉱関係	炭鉱・親戚	炭鉱・親戚、お湯(逆流水)	炭鉱・親戚	体全体	炭鉱・親戚	徒歩で葬列を組む	自宅	自宅	堺内の釜の火葬場	不明
5	H(1938)(男)	(1857~1947)	本郷町	炭鉱→農業	自宅	炭鉱→農業	炭鉱関係	炭鉱関係	炭鉱関係	炭鉱・親戚	お湯(逆流水)	炭鉱・親戚	体全体	炭鉱・親戚	馬車馬橋	自宅	自宅	公営火葬場	墓地
6	M(1932)(男)	(1903~1951)	高台(現養春別荘山手地区)	公務	自宅	公務	葬儀社	葬儀社	葬儀社	葬儀社	お湯(逆流水)	葬儀社	顔・手足	葬儀社	馬橋	区(炭鉱)の集金場	区(炭鉱)の集金場	公営火葬場	墓地
7	H(1938)(男)	(1833~1956)	本郷町	農業	自宅	農業	炭鉱関係	炭鉱関係	炭鉱関係	炭鉱・親戚	お湯(逆流水)	炭鉱・親戚	体全体	炭鉱・親戚	馬橋	自宅	自宅	公営火葬場	墓地
8	K(1934)(男)	(1895前後~1985)	堺内	炭鉱	自宅	炭鉱	炭鉱関係	炭鉱関係	炭鉱関係	炭鉱・親戚	アルコールで拭く	炭鉱・親戚	顔	炭鉱・親戚	徒歩で葬列を組む	集金場	集金場	堺内の釜の火葬場	寺の納骨堂
9	T(1932)(男)	(?~1965)	狛生	炭鉱	自宅	炭鉱	不明	不明	不明	不明	アルコールで拭く	不明	体全体	不明	徒歩で葬列を組む	会館	会館	公営火葬場	寺の納骨堂
10	N(1946)(男)	(1891.2~1972)	岡山	農業	自宅	農業	葬儀社	葬儀社	葬儀社	なし	なし	なし	なし	納棺士	霊柩自動車	自宅	自宅	公営火葬場	墓地
11	T(1932)(男)	(?~1975)	狛生	炭鉱	自宅	炭鉱	不明	不明	不明	なし	アルコールで拭く	不明	体全体	不明	マイクローバス	会館	会館	公営火葬場	寺の納骨堂
12	O(1919)(男)	(1888~1977)	岡山	農業	病院	農業	葬儀社	葬儀社	葬儀社	葬儀社	アルコールで拭く	葬儀社	手・足	葬儀社	馬車	自宅	自宅	公営火葬場	墓地
13	A(1925)(男)	(1896~1977)	堺内	炭鉱	病院	炭鉱	葬儀社	葬儀社	葬儀社	葬儀社	不明	葬儀社	体全体	葬儀社	霊柩自動車	寺	寺	公営火葬場	寺の納骨堂
14	A(1925)(男)	(1900~1977)	堺内	炭鉱	病院	炭鉱	葬儀社	葬儀社	葬儀社	葬儀社	不明	葬儀社	体全体	葬儀社	霊柩自動車	寺	寺	公営火葬場	寺の納骨堂
15	H(1938)(男)	(1889~1980)	本郷町	農業	病院	農業	葬儀社	葬儀社	葬儀社	葬儀社	お湯(逆流水かは不明)	葬儀社	体全体	葬儀社	霊柩自動車	葬儀社	葬儀社	公営火葬場	墓地
16	H(1938)(男)	(1910~1981)	本郷町	農業	自宅の畑	農業	葬儀社	葬儀社	葬儀社	葬儀社	お湯(逆流水かは不明)	葬儀社	体全体	葬儀社	霊柩自動車	葬儀社	葬儀社	公営火葬場	墓地
17	U(1932)(男)	(1905~1981)	榑町	徳内の警察官	病院	徳内の警察官	葬儀社	葬儀社	葬儀社	葬儀社	炭酸飲料に浸した水	葬儀社	体全体	葬儀社	霊柩自動車	葬儀社	葬儀社	公営火葬場	墓地
18	U(1932)(男)	(1898~1985)	榑町	徳内の警察官	病院	徳内の警察官	葬儀社	葬儀社	葬儀社	葬儀社	炭酸飲料に浸した水	葬儀社	体全体	葬儀社	霊柩自動車	葬儀社	葬儀社	公営火葬場	墓地
19	S(1932)(男)	(1900~1988)	本郷町	農業	自宅	農業	葬儀社	葬儀社	葬儀社	葬儀社	アルコールで拭く	葬儀社	顔・手足	葬儀社	霊柩自動車	寺	寺	公営火葬場	寺の納骨堂
20	N(1947)(男)	(1895~1989)	岡山	農業	病院	農業	葬儀社	葬儀社	葬儀社	葬儀社	なし	なし	なし	納棺士	霊柩自動車	寺	寺	公営火葬場	墓地
21	S(1932)(男)	(1893~1980)	本郷町	農業	病院	農業	葬儀社	葬儀社	葬儀社	葬儀社	アルコールで拭く	葬儀社	顔・手足	葬儀社	霊柩自動車	寺	寺	公営火葬場	寺の納骨堂
22	Y(1946)(女)	(1909~1980)	狛生	炭鉱	病院	炭鉱	葬儀社	葬儀社	葬儀社	葬儀社	不明	葬儀社	体全体	葬儀社	霊柩自動車	市民センター	市民センター	公営火葬場	墓地(礼拝)
23	A(1936)(男)	(1912頃~1980)	堺内	炭鉱	病院	炭鉱	葬儀社	葬儀社	葬儀社	葬儀社	なし	なし	なし	葬儀社	霊柩自動車	市民センター	市民センター	公営火葬場	寺の納骨堂
24	A(1936)(男)	(?~1986)	堺内	炭鉱	病院	炭鉱	葬儀社	葬儀社	葬儀社	葬儀社	不明	葬儀社	体全体	葬儀社	霊柩自動車	寺	寺	公営火葬場	寺の納骨堂
25	B(1936)(男)	(1920~1989)	堺内	炭鉱	病院	炭鉱	葬儀社	葬儀社	葬儀社	葬儀社	なし	なし	なし	葬儀社	霊柩自動車	市民センター	市民センター	公営火葬場	墓地
26	M(1931)(女)	(1924~2004)	柏町	公務	病院	公務	葬儀社	葬儀社	葬儀社	葬儀社	アルコールで拭く	葬儀社	顔・手足	葬儀社	霊柩自動車	市民センター	市民センター	公営火葬場	墓地
27	H(1938)(男)	(1914~2004)	本郷町	農業	病院	農業	葬儀社	葬儀社	葬儀社	葬儀社	お湯(逆流水かは不明)	葬儀社	体全体	葬儀社	霊柩自動車	市民センター	市民センター	公営火葬場	墓地
28	N(1948)(男)	(1914~2008)	岡山	農業	病院	農業	葬儀社	葬儀社	葬儀社	葬儀社	なし	なし	なし	葬儀社	霊柩自動車	葬儀社	葬儀社	公営火葬場	墓地
29	O(1919)(男)	(1922~2010)	岡山	農業	病院	農業	葬儀社	葬儀社	葬儀社	葬儀社	アルコールで拭く	葬儀社	手・足	葬儀社	霊柩自動車	葬儀社	葬儀社	公営火葬場	墓地
30	N(1949)(男)	(1919~2012)	岡山	農業	病院	農業	葬儀社	葬儀社	葬儀社	葬儀社	なし	なし	なし	葬儀社	霊柩自動車	葬儀社	葬儀社	公営火葬場	墓地

凡例	死亡場所	通夜・葬儀	運び方	通夜・葬儀を行なう場所	土葬・火葬	納骨(埋骨)場所
	自宅以外の場所 で死亡	通夜・葬儀等が 行われた もの	馬を使用した もの 霊柩自動車 利用したもの	寺・集金場等	葬儀社等が 用いる施設等	野焼き 火葬施設 火葬

※湯洗いは変化したもの、濃い線はより変化が進んだものである(納骨(埋骨)場所の項目を除く)

が、1977年死亡の事例12から病院で死亡するように変化した。変化は一気に起こっていることが確認できた。

死亡場所が自宅から病院へと変化したことについて、話者の証言から、その理由について明確な回答を得ることはできなかった。病院での死亡が増えたことについて、関沢(2001)は、国民皆保険が1961年から実施されていることに着目し、全国的に見て、1977年に病院死が自宅死を上回ったことを指摘している。三笠市でもこれと時期が合致しており、この制度が病院で死亡する変化と関わっているのだと考えることができる。

②葬具作りの担当の変化

葬具作りの担当についてである。棺作りの担当は地域社会の担当であったのが、葬儀社の担当へ変化した。1956年死亡の事例7の葬儀頃まで地域社会の人間が担当していたのが、1965年死亡の事例9の葬儀から葬儀社の担当へ変化した。

位牌作りの担当も、地域社会の人間であったのが、葬儀社からの提供へ変化した。1956年死亡の事例7の葬儀頃まで地域社会の人間が担当していた。1965年死亡の事例8, 9の葬儀、1975年死亡の事例11の葬儀では寺が提供している。1972年死亡の事例10の葬儀からは葬儀社の担当へ変化している。

四花作りの担当もまた、地域社会の担当から、葬儀社の担当へと変化した。1956年死亡の事例7の葬儀頃まで地域社会の人間が担当していたのが、1977年死亡の事例12の葬儀からは葬儀社の担当へと変化した。

死装束作りの担当は、地域社会や家族や親戚の担当から、葬儀社の担当へと変化した。1975年死亡の事例11の葬儀まで地域社会や、死者の家族や親戚が担当していたのが、1977年死亡の事例12の葬儀から葬儀社の担当へと変化した。

葬具作りは、おおよそ1965年から1977年頃にかけて家族や親戚、地域社会の担当から葬儀社の担当へと変化していた。図-1 三笠市の産業従事者数を確認してみると、炭鉱の閉山と併せて、第二次産業従事者だけでなく、第三次産業従事者が減少していることが確認できる。また、第一次産業従事者も減少傾向にあることが確認できる。図-2 三笠市の人口を確認してみると、炭鉱閉山時に急激な人口の減少が見られる。炭鉱の閉山で、炭鉱関係者を相手にしていた人々も、職を求めて市外へと転出していったのだと考えられる。

農業をしていた1919年生の話者O(男)によると、昔は隣近所が手伝いをするのが当たり前だったが、近くの知り合いが減っていくにしたがって、手伝いをするのが難しくなったということである。

人口の減少によって、隣近所による葬具作りなどの手伝いが難しくなり、葬具作りにおいて、葬儀社を頼っていったのだと考えられる。なお、炭鉱業を生業としていた1936年死亡の事例2、1940年頃死亡の事例4、1965年死亡の事例8の葬儀では、炭鉱関係者が葬具を制作していた。三笠市では、炭鉱が一つの地域を形成しており、炭鉱業に従事していた人の葬儀が行なわれる際などには、関係者が手伝いを行っていた。隣近所などの人ではないが、街を形成していた産業が習俗への影響力を持っていたことが考えられる。

③湯灌・入棺の変化

湯灌や入棺の担当や方法に関してである。湯灌の担当は、家族や親戚の担当だったが、

図-1 三笠市の産業従事者数¹

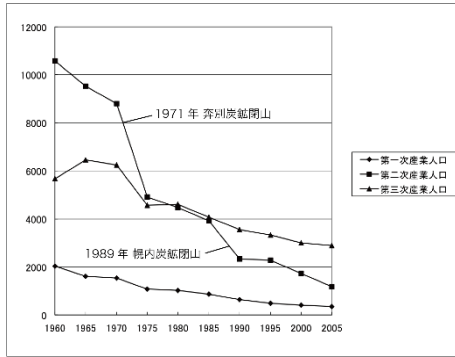
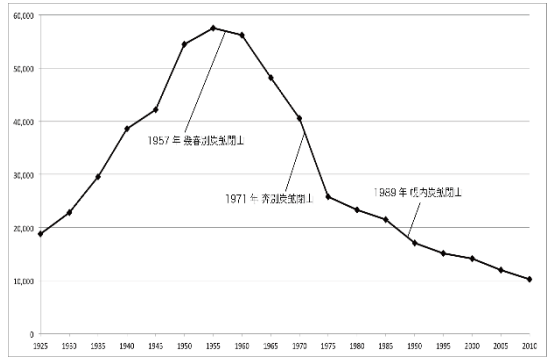


図-2 三笠市の人口



それらに葬儀社の加わる段階を経て、一部で葬儀社のみが担当するように変化している。1977年死亡の事例12の葬儀まで家族や親戚が担当していたのが、同1977年死亡の事例13の葬儀から家族や親戚に加え葬儀社が加わるようになる。そして、1990年死亡の事例22の葬儀から葬儀社のみが担当する事例が多くなる傾向がある。その一方で、家族や親戚のみの担当が、全年代を通して確認できる。

湯灌に使用する液体は、アルコールやお湯、水で、それらを脱脂綿に浸すなどして行っていた。それらに年代的な特徴は確認できなかった。また、こうした行為は湯灌と呼ばれているが、盥の中で遺体を洗うといった行為は確認できなかった。

湯灌に使用する液体の用意は、家族や親戚の担当から、葬儀社の担当へ変化している。1965年死亡の事例8の葬儀までは家族や親戚の担当であったのが、1977年死亡の事例12の葬儀からは葬儀社の担当へと変化していた。

入棺の担当は、家族や親戚の担当だったのが、それらに葬儀社の加わる段階を経て、葬儀社のみが担当するように変化している。1977年死亡の事例12の葬儀まで家族や親戚が担当していたのが、同年の1977年死亡の事例13の葬儀から、家族や親戚に加え、葬儀社が加わる。2004年死亡の事例27の葬儀から、葬儀社のみ担当へと変化している。ただし、年代を通して家族や親戚が担当することも顕著であった特徴が確認できた。

湯灌や入棺の担当は、家族や親戚だったのが、葬儀社の担当へと変化していたことが確認できる。ただし、年代を通して家族や親戚が担当している部分も少なくないことから、遺体に直接触れる作業は社会的な変化を受けるも、変化はゆるやかであることが考えられる。

④ 遺体の運搬方法

遺体の墓地や火葬場への運び方についてである。遺体の運び方は、徒歩で葬列を組んだり、馬車や馬櫓だったのが、葬儀社の用意した霊柩自動車での運搬に変化している。1956年死亡の事例7の葬儀までは馬車で遺体を運搬していた。徒歩で葬列を組んでいたのは1936年死亡の事例2、1940年頃死亡の事例4、その後の1965年死亡の事例8、9の葬儀である。1972年死亡の事例10の葬儀から、霊柩自動車での運搬に変化しているが、1977年死亡の事例12の葬儀でも、馬車によって遺体が運ばれている。

1965年まで、徒歩で葬列を組んだり、馬車や馬櫓を利用したりして墓地や火葬場まで遺体を搬送している理由であるが、三笠市史編さん委員会(1993)によれば、1966年まで幌

内、弥生、清住の三か所の集落に、火葬場が設置されており、比較的家の近くに火葬場があったという。三笠市では、1966年に、火葬場を清住の一家所に集約したという。火葬場を集約したことで、火葬場まで距離的に遠いところに住む人は、徒歩や馬では、火葬場まで行くことが難しくなったのだと考えられる。また、同書によると、1966年に三笠市では火葬場を集約するにあたり、168万円で購入したマイクロバス型の霊柩自動車を購入している。1972年以降ほぼ霊柩自動車の利用に変化していることは、火葬場が遠くなったことと、市の霊柩自動車所有が原因となっていることが考えられる。

1919年生の話者O(男)によると、昔は火葬する場所が家の近くにあったので、馬車や馬車で運べたし、ついていく人も歩いて行くことができたが、火葬場が遠くなって、そうした方法では火葬場まで行けなくなったと証言している。

⑤通夜や葬儀を行う場所

通夜や葬儀を行なう場所についてである。通夜や葬儀を行なう場所は、自宅から集会所や会館で行なう時期を経て寺へ変化し、その後さらに市民センターや葬祭場で行なうように変化している。1947年死亡の事例5の葬儀までは自宅で行なっていたのが、1951年死亡の事例6の葬儀から1977年死亡の事例12の葬儀までは自宅や集会所、会館で行なわれる状態になる。その後、1977年死亡の事例13の葬儀から1990年死亡の事例21の葬儀まで寺が頻繁に使用される状態になる。1990年死亡の事例22の葬儀からは市民センターや葬祭場などへと変化している。

自宅や集会所などが混ざり合う時期が1977年死亡の事例12の葬儀まで続いている。三笠の炭鉱では、炭鉱会社とは別に、採炭する人達を指導する立場の親分と呼ばれる人物がいた。炭鉱で働く人はこの親分格にあたる人物に採炭等の指導を受けていた。この親分を祖父に持つ1925年生の話者Aによると、炭鉱で働く人達を監督する親分の立場にあった人などは、家を開放して、多くの人を収容できる家を持っていたということである。家の建て替えなどで、そういう家がなくなってきた、寺などを利用するようになったのだという。一方で、元炭鉱労働者で1932年生の話者T(男)によると、炭鉱で働いていた人達には、自宅に死者の魂が留まってしまうという考えがあり、自宅から離れたところで葬儀を行っていたのだという。炭鉱労働者によっても、考え方に違いがあったことが見られる。こうした違いが生じる原因については事例数が十分でなく、確認できなかった。

なお、会場の設えについて1934年生の話者K(男)によれば、炭鉱には営繕係という部署があり、炭鉱で働いていた人の葬儀があった場合、営繕係が集会所に祭壇を設えることになっていたという。会社が炭鉱関係者の葬送習俗を手伝っていたことが分かる。

一方で、農業をしている1938年生の話者H(男)によると、農家では、襖を取り除き、家を解放して、参加者を全員収容して葬儀や結婚式を行なっていたということである。職業が農業である人達の葬儀会場に注目すると、1956年死亡の事例7、1972年死亡の事例10、1977年死亡の事例12などが自宅で葬儀を行っていた。ただし、1938年生の話者Hによると、農家も家が小さくなってきて、自宅に参加者が入れなくなり、葬祭場を利用するようになったのだということである。

こうしたことから、1970年代までは、農業従事者や、大きな家を持つ炭鉱関係者は自宅で通夜や葬儀を行ない、一般の炭鉱労働者は、炭鉱が所有する集会所や、寺で通夜や葬儀

を行っていたのだと考えられる。

1980年代になると、葬祭場の利用が現れてきている。1938年生の話者H(男)によると、葬祭場は、親戚や近所が何も用意しなくても全てやってくれるから、利用するようになったということである。葬祭場への変化には、隣近所の手伝いが少なくなってきたことが原因となっているのだと考えられる。

⑥遺体の処理の方法

遺体の処理の方法についてである。遺体の処理の方法は、土葬から野焼きの状態を経て、公営火葬場での火葬へと変化した。1928年死亡の事例1の葬儀では土葬が行なわれ、1939年死亡の事例3の葬儀では野焼きが行なわれていた。一方で、炭鉱関係者の1936年死亡の事例2、1940年頃死亡の事例4、1965年死亡の事例8は、幌内の釜でできた火葬場だったという。1934年生の話者K(男)によると、釜の火葬場は石炭を燃料として焼く窯で、焼く担当者も炭鉱の関係者だったと記憶しているということである。1947年死亡の事例5の葬儀からは公営火葬場での火葬へと変化している。

遺体の処理は、土葬が1928年死亡の事例1に、野焼きが1939年死亡の事例3に見られるものの、1947年死亡の事例5からは主に公営火葬場での火葬になっている。杉淵(1971)によると、これまで個人のはあったが、村が所有する火葬場ができるようになるのは、幌内の火葬場の買収による、1917年8月からであるという。また、昭和20年頃には三笠市内の各墓地にできた火葬場では使用者が燃料を持ってきて自ら火葬をする状態だったという。

1919年生の話者O(男)によると、公営火葬場での火葬にしたのは、設備の良い火葬場ができたからだということである。1947年から公営火葬場の利用が多くなるようになった理由については確認できなかったが、手軽にできる公営の火葬場が時代とともに周知されてきたことも、火葬場での火葬へと変化したことと関係していると考えられる。

⑦遺体の埋葬・納骨場所

遺体の埋葬・納骨場所についてである。これについては、時代差よりも、埋葬・納骨場所の確認が、地域の特徴を見るために必要なデータとなるため、年代別の結果よりも、事例数で見てみることにする。屋外の墓地に納めた事例は19事例である。また、寺の屋内の納骨堂に納めた事例は10事例である。

三笠市では、屋外の墓地に遺骨を納めるほか、屋内の寺の納骨堂に遺骨を納めるのも一般的である。話者T(男)によると、納骨堂は天気に関係なくお参りにいくことができるからということである。冬には雪が降り、屋外の墓地だとお参りにいけないという気候的条件が、寺の納骨堂も一般的にした理由の一つであると考えられる。三笠市では、寺の納骨堂に遺骨を納めることも一般的である。一方、炭鉱労働者には、友子制度と呼ばれる師弟関係の中で、子分が親分の墓を建立するという決まり事が存在している²。そのため、三笠市では屋外の墓地に埋葬する事例が多く残っているものと考えられることができる。

3. 料理の変化（表-2 料理の変化 参照）

①通夜や葬儀当日の料理

通夜や葬儀当日の料理に出される食材についてである。魚などのナマモノを使用しなかった状態から、ナマモノを提供するように変化している。1972年死亡の事例10の葬儀までナマモノの提供はほぼなかったのが、主に1975年死亡の事例11の葬儀からナマモノの提供が始まっている。ただし、話者の証言をまとめると、1981年死亡の事例16の葬儀まででナマモノの提供がいったん収束し、同年の1981年死亡の事例17の葬儀から1990年死亡の事例22の葬儀まではナマモノの提供がなく、1990年死亡の事例23の葬儀から再びナマモノが加わり出していることが確認できる。この間、ナマモノの提供がなくなっている理由については不明である。

1925年生の話者A（男）によると、葬儀社が葬儀を担当するようになって、ナマモノを勝手に出すようになり、変だと思ったが、別に文句を言うほどのものじゃなかったと証言している。1965年死亡の事例9や1977年死亡の事例13、2004年死亡の事例26の葬儀では担当が地域社会であったにもかかわらずナマモノが提供されてはいるが、おおよそ葬儀社や仕出し屋の関与が、ナマモノの提供と関係していると考えられる。

②料理の担当

料理の担当についてである。料理は地域社会が担当していたのが、葬儀社が担当するように変化している。1972年死亡の事例10の葬儀まで地域社会の人々が担当している。料理に出される食材同様、1975年死亡の事例11の葬儀から葬儀社の提供が開始されている。1981年死亡の事例17の葬儀から1990年死亡の事例22の葬儀までは葬儀社の提供がなく、地域社会の提供である。1990年死亡の事例23の葬儀から再び葬儀社が加わり出していることが確認できる。

なお、ナマモノが提供された際の担当の多くが葬儀社や仕出し屋であったことから、葬儀社の関与がナマモノの提供を促していった原因になったのだと考えられる。葬儀社や仕出し屋が料理を用意するようになったのは1975年死亡の事例11の葬儀頃であるため、葬具の変化のところで述べたような、1971年の奔別炭鉱の閉山と、人口の減少によって、隣近所による手伝いが難しくなったことが、葬儀社が担当するように変化した原因と考えられる。それでも、料理作りは1990年死亡の事例22の葬儀までは、地域社会が担当する事例も残存している。

農業を行っていた1932年生の話者S（男）によると、町内の人が死んだら、婦人達が料理だけは手伝いに出て作っていたと証言していた。ただし、葬儀社の経営する葬儀会場等だと、すべて業者任せになるということだった。1981年死亡の事例17の葬儀から1990年死亡の事例21の葬儀までは寺が通夜や葬儀の会場となっており、この間は地域社会が料理を担当し、ナマモノの提供はない。会場の変化も、料理作りの担当の変化と関係しているのだと考えられる。

③終了後のもてなし

終了後のもてなしについてである。家族や親戚が料理を作り、参加者をもてなしていたのが、土産の折り詰めを渡して解散するように変化している。1972年死亡の事例10の葬

表-2 料理の変化

事例	話者と生年	死者の生年と死亡年	通夜の料理	担当	葬儀当日	担当	火葬場での飲食	担当	終了後のもてなし	担当	土葬	担当
1	O(1919)(男)	(1881~1928)	米飯・酒	地域社会	米飯・酒	地域社会	—	—	不明	不明	アナホリに酒や料理を運んだ	地域の若い衆
2	A(1925)(男)	(1864~1936)	米飯・酒	地域社会	米飯・酒	地域社会	不明	不明	不明	不明		
3	O(1919)(男)	(1861~1939)	米飯・酒	地域社会	米飯・酒	地域社会	不明	不明	なし・解散	—		
4	K(1934)(男)	(1880頃~1940頃)	米飯・酒	地域社会	米飯・酒	地域社会	なし	—	なし(世話役の家にお礼に行く)	家族		
5	H(1938)(男)	(1857~1947)	米飯の他不明	地域社会	米飯の他不明	地域社会	米飯の他不明	地域社会	不明	不明		
6	M(1932)(男)	(1903~1951)	米飯・酒	地域社会	米飯・酒	地域社会	米飯・酒	地域社会	米飯・酒	家族・親戚		
7	H(1938)(男)	(1883~1956)	米飯・酒	地域社会	米飯・酒	地域社会	米飯・酒	地域社会	不明	不明		
8	K(1934)(男)	(1895前後~1965)	米飯・酒	地域社会	米飯・酒	地域社会	なし	—	なし(世話役の家にお礼に行く)	家族		
9	T(1932)(男)	(?~1965)	魚の他不明	地域社会	不明	地域社会	不明	地域社会	なし	—		
10	N(1946)(男)	(1891.2~1972)	米飯・酒	地域社会	米飯	地域社会	米飯・酒	地域社会	米飯・酒	家族・親戚		
11	T(1932)(男)	(?~1975)	魚の他不明	葬儀社	魚の他不明	葬儀社	魚の他不明	葬儀社	なし	—		
12	O(1919)(男)	(1888~1977)	米飯・酒	地域社会	米飯・酒	地域社会	米飯・酒	地域社会	土産の折り詰め	葬儀社		
13	A(1925)(男)	(1896~1977)	米飯・酒・魚・肉	地域社会	米飯・酒・魚・肉	地域社会	米飯・酒・魚・肉	地域社会	不明	不明		
14	A(1925)(男)	(1900~1977)	米飯・酒・魚・肉	葬儀社	米飯・酒・魚・肉	葬儀社	米飯・酒・魚・肉	葬儀社	不明	不明		
15	H(1938)(男)	(1889~1980)	米飯・酒・魚・肉	葬儀社	米飯・酒・魚・肉	葬儀社	米飯・酒・魚・肉	葬儀社	土産の折り詰め	葬儀社		
16	H(1938)(男)	(1910~1981)	米飯・酒・魚・肉	葬儀社	米飯・酒・魚・肉	葬儀社	米飯・酒・魚・肉	葬儀社	土産の折り詰め	葬儀社		
17	U(1932)(男)	(1905~1981)	米飯・酒	地域社会	米飯・酒	地域社会	米飯・酒	地域社会	米飯・酒	仕出し屋		
18	U(1932)(男)	(1898~1985)	米飯・酒	地域社会	米飯・酒	地域社会	米飯・酒	地域社会	米飯・酒	仕出し屋		
19	S(1932)(男)	(1900~1988)	米飯・酒	地域社会	米飯・酒	地域社会	米飯・酒	地域社会	土産の折り詰め	仕出し屋		
20	N(1947)(男)	(1895~1989)	米飯・酒	地域社会	米飯	地域社会	米飯・酒	地域社会	弁当の土産	仕出し屋		
21	S(1932)(男)	(1893~1990)	米飯・酒	地域社会	米飯・酒	地域社会	米飯・酒	地域社会	土産の折り詰め	仕出し屋		
22	Y(1946)(女)	(1909~1990)	米飯・酒	地域社会	米飯・酒	地域社会	米飯・酒	地域社会	弁当の折り詰め	仕出し屋		
23	B(1936)(男)	(1912頃~1990)	米飯・酒・魚・肉	葬儀社	米飯・酒・魚・肉	葬儀社	米飯・酒・魚・肉	葬儀社	不明	不明		
24	A(1925)(男)	(~1996)	米飯・酒・魚	葬儀社	米飯・酒・魚	葬儀社	米飯・酒・魚	葬儀社	不明	不明		
25	B(1936)(男)	(1920~1999)	米飯・酒・魚・肉	葬儀社	米飯・酒・魚・肉	葬儀社	米飯・酒・魚・肉	葬儀社	不明	不明		
26	M(1931)(女)	(1924~2004)	米飯・酒・魚	地域社会	米飯・酒・魚	地域社会	米飯・酒・魚	地域社会	弁当の折り詰め	仕出し屋		
27	H(1938)(男)	(1914~2004)	米飯・酒・魚・肉	葬儀社	米飯・酒・魚・肉	葬儀社	米飯・酒・魚・肉	葬儀社	土産の折り詰め	葬儀社		
28	N(1948)(男)	(1914~2008)	米飯・酒・魚・肉	仕出し屋	米飯・魚・肉	仕出し屋	米飯・酒・魚・肉	仕出し屋	弁当の土産	仕出し屋		
29	O(1919)(男)	(1922~2010)	米飯・酒・魚	仕出し屋	米飯・酒・魚	仕出し屋	米飯・酒・魚	仕出し屋	土産の折り詰め	仕出し屋		
30	N(1949)(男)	(1919~2012)	米飯・酒・魚・肉	仕出し屋	米飯・魚・肉	仕出し屋	米飯・酒・魚・肉	仕出し屋	弁当の土産	仕出し屋		

凡例	魚が使用されているもの	葬儀社等が関与したものの	土産を配るもの
----	-------------	--------------	---------

※網掛けは変化したもの

儀まで家族や親戚がもてなしていたのが、1977年死亡の事例12の葬儀から土産の折り詰め提供が始まり、用意する担当者も、葬儀社や仕出し屋になっている。

こうした原因について、1938年生の話者H(男)によると、いつ頃からかは分からないが、最近の葬儀では、死者の身内は何もしなくていいというような風潮になっているということだった。葬儀社が、家族や親戚の行なう、いわゆる面倒な仕事を行なうようになったことが、変化の原因と考えられる。また、葬具の変化や料理の用意の担当の変化同様、炭鉱閉山による人口の減少で、隣近所が葬儀を手伝うことが難しくなり、葬儀全般を葬祭業者等が担当するようになったことが、こうした変化を促したとも考えられる。

4. 年代ごとの整理

以上のことを踏まえて、三笠市の葬儀を年代ごとにまとめてみる。1940年代までは家族や親戚、地域社会の人間によって葬儀が行なわれていた。その後、1950年代から1970年代までは、葬儀社が加わってくる傾向にあった。1980年代は葬儀社が葬儀のほとんどをとり行うようになっている。その一方で、料理作りだけは、地域社会の手伝いがあった。1990年代以降は、葬儀社が葬儀の全般をとり行うようになっていた。

こうした葬儀の変化は、1961年の国民皆保険制度導入で、自宅での死から病院での他者を頼る死に方に変化したことから始まり、1966年の火葬場集約、1971年の奔別炭鉱の閉山とそれにともなう人口の減少によって葬儀の手伝いが難しくなるといった、社会状況の変化が関わっているものと考えられる。三笠市の事例からは、こうした社会状況の変化によって、家族や親戚、地域社会の中での葬儀から、第三者の葬儀社を頼る葬儀へと変化していることが確認できた。ただし、葬儀社へと変化する一方で、湯灌や入棺など、遺体に直接触れるような作業のように、葬儀社が入ってくる傾向はあるものの、年代を通して家族や親戚によって行なわれることも少なくない要素も存在していた。これは、三笠市における葬送習俗の諸要素が、社会状況の変化とともに一律に変化するのではなく、変化のゆるやかな要素もあるという結果であると考えられる。

5. まとめ —三笠市の葬送習俗の変化

ここまで、三笠市の葬儀の変化と原因について述べてきた。その変化の原因の主なものとして、炭鉱の閉山にともなう人口の減少などをあげることができた。そこから見出せる三笠市の葬儀の変化の内容は以下の諸点である。

- 1) 1960年代から1970年代にかけて、三笠市域の葬儀では、家族や親戚や炭鉱関係を含む地域社会の人達の担当から葬儀社が担当するように変化した。これには、炭鉱の閉山にともなう、人口の減少が関係していると考えられる。
- 2) 湯灌・入棺のように、死者と直接触れ合う行為の担当者は、他の要素が葬儀社の担当へ変化する中であって徐々に変化をしていきながらも、年代を通して血縁の関係者が担当するということかたちが継承され続けるという傾向性が指摘できる。
- 3) 1966年の火葬場の集約によって、火葬場までの距離が遠くなったことで、旧来の徒歩や馬車の利用が行なわれなくなり、ほぼすべて霊柩自動車を利用する遺体運搬に変化した。
- 4) 通夜や葬儀の会場は、農家や、大きな家を持つ炭鉱関係者では自宅で、一般の炭鉱労働者は寺や集会場などを利用していたが、1977年以降は自宅では行わなくなった。

- 5) 屋外の墓地に遺骨を納めるほか、屋内の納骨堂に遺骨を納める方式は古くから一般的にみられた。
- 6) 料理作りは、他の要素が葬儀社の担当へ変化する中、長く地域社会が用意する傾向があった。しかし、1990年には葬儀社や仕出し屋の担当へと変化しており、炭鉱の閉山にともなう人口の減少が関係していると考えられる。

謝辞

本稿作成にあたって親切に聞き取り調査にご協力いただいた話者の方々、そして本稿に対して熱心にご指導、ご助言をくださった査読者の方々に深甚の謝意を表します。

注

1. 本文中で使用した図は三笠市が発行した『三笠市統計書』（昭和39～平成24年度版）を利用して作製した。
2. 鉱業における親分と子分の関係を友子制度といい、その起源は村串（1998）によれば、江戸時代にまでさかのぼることができるという。友子制度の研究史は、村串以外にも多数存在し、三笠の友子制度が関係して建立された墓について調査や考察をしたものとしては、北海道開拓記念館（1974）や、矢野・福本（2012）、高橋（2014）のものがある。

参考文献

杉渕徳治

1971『三笠市史』p.712, 三笠市役所

関沢まゆみ

2001『第36回歴博フォーラム 民俗の変容 葬儀と墓の行く方』国立歴史民俗博物館

高倉新一郎

1974『日本の民俗 北海道』第一法規

高橋史弥

2014「炭鉱労働者の友子の墓における墓石情報の変化について —三笠市幌内墓地・弥生墓地の友子の墓より—」『日本民俗学』280: 1-35, 日本民俗学会

北海道開拓記念館

1974「明治初期における炭鉱の開発 —幌内炭鉱における生活と歴史—」『北海道開拓記念館調査報告』7: 1-89

三笠市

1965-2013『三笠市統計書』昭和39～平成24年度版

三笠市史編さん委員会

1993『新三笠市史通史編』: 1108, 三笠市

宮良高弘・萩中美枝・小田嶋政子

1998『北海道の家族と人の一生』北海道新聞社

村串仁三郎

1998『日本の鉱夫 —友子制度の歴史—』世界書院

矢島睿

1979『北海道の葬制・墓制』明玄書房

矢野牧夫・福本寛

2012「北海道三笠市の友子の墓について」『田川市石炭・歴史博物館館報』5: 23-37, 田川市石炭・歴史博物館

(たかはし・ふみや／福井県教育庁 生涯学習・文化財課)